

かつのお
勝尾城

鳥栖市教育委員会

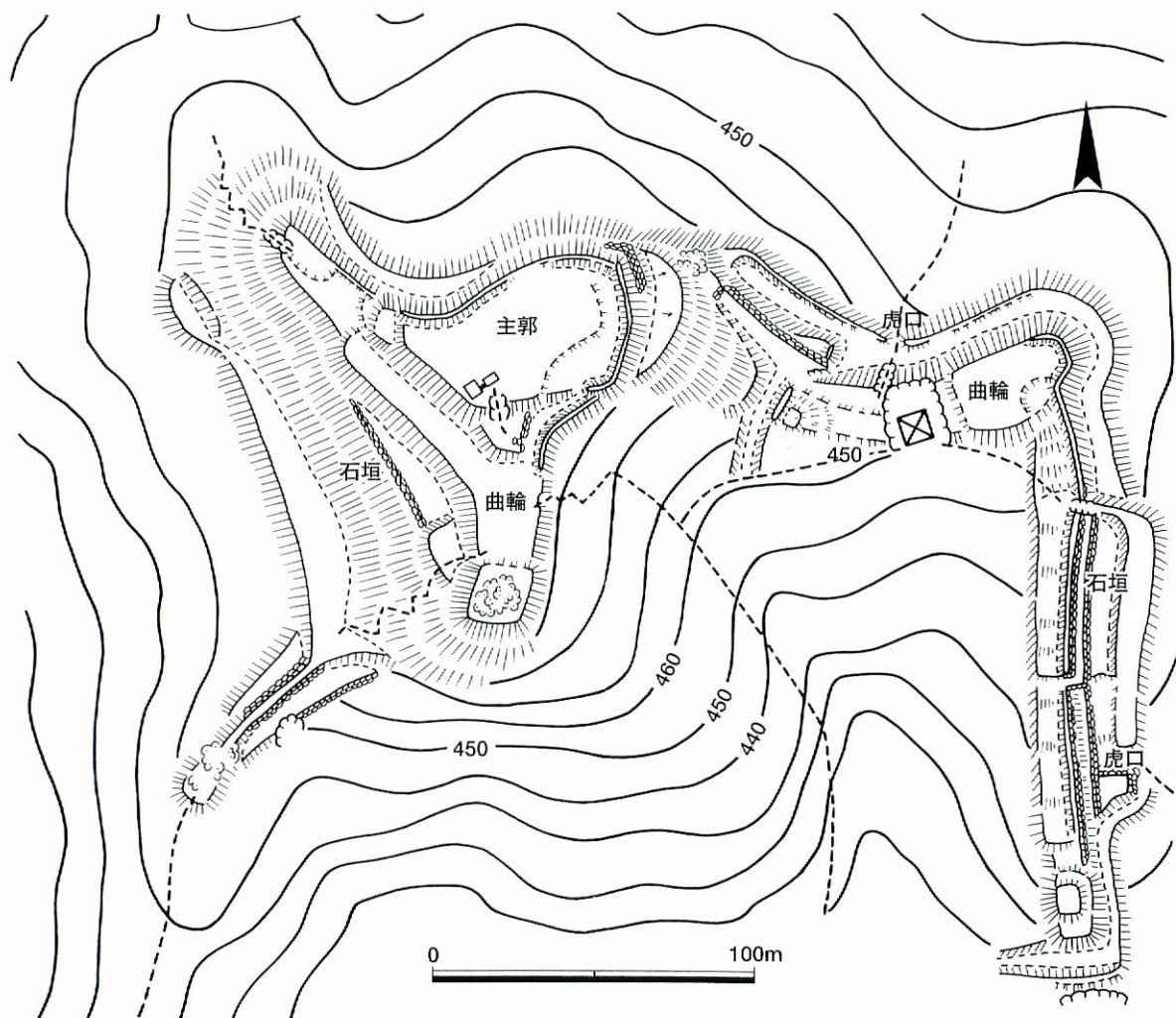


勝尾城石垣（北から）

鳥栖市北西部の城山山頂（標高501.3m）に、筑紫氏の本城勝尾城があります。江戸時代の記録『九州治乱記』によると、勝尾城は応永30年（1423）、室町幕府の九州探題渋川義俊によって築かれたとされています。その後、明応6年（1497）頃に筑紫満門が入城し、天正14年（1586）九州制覇をめざす島津氏の攻撃によって落城するまでのおよそ90年間、筑紫氏は勝尾城を本城として東肥前を中心に筑前・筑後にまで勢力を振ります。

城郭の基本構成は、谷を内に取込みあたかも鳥が翼を広げるかのように、曲輪（防御のため人工につくられた平らな場所）が配されています。主郭（本丸）を中心として大きく3ヶ所の曲輪が連結されており、それぞれの曲輪には土塁（防御のための土手）、石垣等の遺構が良く残っています。

勝尾城の一番の特徴は、石垣を多用していることです。本城の石垣は手で持てる程の大きさの横に長い自然石を約1.5mの高さに積上げ、一度後ろに控えをもたせ、二段・三段に積上げる技法をとっています。これは、江戸時代の城の石垣にみられるような、一気に高く石を積上げる技術が当時はまだなかったためです。



勝尾城主要部縄張図 (千田嘉博氏 作図)

中世の山城において、石垣を使用している例はあまりみられません。九州で本格的に石垣を用いた城は、天正19年(1591)に豊臣秀吉によって近江国(滋賀県)から、穴太衆と呼ばれる石工集団を呼び築城された名護屋城(佐賀県鎮西町)がその始まりとされています。

勝尾城は、名護屋城の築城以前から城の随所に石垣を多用しています。このことは、穴太衆の石垣技術が導入される以前に、この地方独自の技術でつ

くられていたことになり、戦国期の築城技術を知る上で全国的にみても大変重要な遺構になると思われます。

また、虎口(城の出入口)は現在2ヶ所確認されており、敵が攻めにくいL字形の構造となっています。城の大手(正面口)は南麓の館跡や武家屋敷跡などが点在する谷の内側にあたり、城の搦手(背面口)は北麓側にあります。

勝尾城の本格的な発掘調査はまだ行っていませんが、今後調査が進んでいくと、さらに遺跡の内容が明らかになるものと思われます。



勝尾城遠景(南から)